

パスカルの心情の概念

『説得術』とあらゆる有益なレトリックの基礎となる人間心理に関するパスカルの見解においては、心情の概念がきわめて重要であるので、これをもっと正確に分析する必要がある。フィリップ・セリエ⁴⁾は、この概念がいかに多くを聖書と聖アウグスティヌスに負っているかを明らかにした。聖書においてすでに心情は知性であり、記憶力であり、意志であると同時に魂のほとんどすべての能力を指している。それは、人間のさまざまな行為のうちにある内的力動性のことであり、肉体と精神にはっきり分かっことも、おのおのの能力を区別することもできない。聖アウグスティヌスにあっては、ただ精神的な価値のみ採用していることを除けば、聖書の与える非常に広い意味を保ち続けている。聖書の影響が否定しがたく認められるいくつかの断章では、パスカルの場合も「心情」という語はこの曖昧な意味を保っている。つまり、意志だけでなく魂や精神にも関係しているのである。しかしパスカルがかれ特有の心情の概念を述べている別のテキストにおいては、心情を精神や理性と対立させている。『説得術』においてと同様、しばしば心情ははっきり意志に等しいものと見なされているように思える。もしパスカルの言う心情が必然的に意志を含むなら、心情は認識行為と無関係ではない。『幾何学的精神』では、パスカルは第一真理の認識は自然の光によって行われると言う。この点ではデカルト主義者である。しかし、この第一真理の問題を論じている『パンセ』の断章(L110)においては自然の光は心情に置き換えられることになる。

われわれは真理を理性によってのみならず心情によっても認めることができる。われわれが第一原理を認めるのは後者の方法(心情)によってであって、このとき何の役にも立たない推理によってこれらの原理を組み伏せようとしても無駄である。

断章の最後でパスカルは「心情の直観」について語っている。したがって、心情と「直観」は明ら

かに精神と推理に対立する。認識能力としての心情は我々が通常直観によって理解することがらを認識する。パスカルはこの直観を調和として、あるいは「詩的な美しさ」を味わうために前提となるある種の調和として説明する。(L585)

快適^{アグレメン}さと美とのある種の典型が存在する。それは、われわれ人間のあるがままの弱いあるいは強い本性と、われわれに気に入ることがらとの間のある種の関係に存在するものである。

意志や直観的認識を超えて、心情はさらに感受性をも含む。感受性のせいで、あることがらわれわれの気に入ったり入らなかつたりするのである。したがって、人間の心理活動における心情の役割は非常に幅広い。精神に対して独立しているかどうかの問題となる。「心情は理性の知らない理性を持っている。」(L423)

パスカルが理性と心情の間に設定する対立関係は、幾何学的精神と繊細の精神との間の有名な区別にも見いだされる。(L512)

したがって、ある繊細な精神のひとびとが幾何学者でないのは、かれらが全く幾何学の原理へ目を向けることができないからであり、幾何学者が繊細でないのは、かれらが自分の前にあるものを見ないからであって、幾何学の明瞭だが粗雑な原理に慣れ、それらの原理をよく見、十分手に取って見たあとでしか推理することに慣れていないため、原理を手にとって見るができない繊細な事柄の間で道に迷ってしまうからである。この種の原理はほとんど見るができない。見ると言うより感じるなのであり、自分でそれらを感じられないひとに感じさせるのは限りなく骨が折れる。これらは非常に微妙かつ多様なため、この直観にしたがって微妙かつ多様なことがらを感じたり、公正に判断するには十分に繊細で十分に明晰な感覚が必要である。たいていの場合、幾何学におけるようには順序正しくこのような直観を証明することはできない。我々はこの直観に関する原理を持っていないからであり、そうしようすることは際

4) 『パスカルと聖アウグスティヌス』120ページ Philippe SELLIER, *Pascal et saint Augustin*, Armand Colin, Paris.